

〈新女性〉の死

——凌叔華「女兒身世太淒涼」をめぐる一考察——

阿部沙織

はじめに

十九世紀末の英国に端を発して起こった女性解放運動がフェミニズムの第一波として世界中を駆け巡ったのは周知のとおりである。このうねりの中で現れた職業を持つ自立した女性、「新しい」女性は“New Woman”と命名された。それが西から東に伝播するかたちで、東アジアにも〈新女性⁽¹⁾〉という記号表現は現れた。日本の「新しい女」であり、中国の「新婦女」「新女子」である。

近代中国においては清末から女性解放運動は出発していたが、それが急激に推し進められたのは五四新文化運動の時期である。清末の女学設立により教育を受けた女性たちの第一世代が成熟する時期とこの時は重なる。『新青年』誌上で胡適によるイプセン「人形の家⁽²⁾」の翻訳が掲載されると、ノラは新時代のヒロインとして熱狂的な歓迎を受ける。それからノラの「家出」が当時の青年たちに現実的な行為として実践され、メディアをにぎわした。ノラというモデルによって創出された〈新女性〉というシニフィアンは言説空間に溢れ出し、男性知識人によって先導される議論に女性も追随しながら、〈新女性〉のイメージはどんどん膨れ上がった。それは、「家を出

るノラ」が中国古来の封建的家庭Ⅱ制度から脱出する新しい青年たちのメタファーとして男女を超えた新しい人間像のモデルとなったからだとは既に指摘されている。⁽³⁾ 第三世界として、被侵略国家として、中国がしばしば女性として表象される例は少なからず指摘される⁽⁴⁾ところであるが、〈新女性〉もそのような文脈で時には当時の人間全体のあるべき姿として捉えられたからこそ、〈新女性〉であるための条件、恋愛や結婚の自由が多くメディアの上で議論されたと考えるのが妥当であろう。

文学テキストの上にも〈新女性〉は現れた。胡適の「終身大事」⁽⁵⁾は中国版ノラの決定版と言って良いだろう。タイトルの「終身大事」はあらゆる意味で象徴的である。この言葉は婚姻をめぐる当時の議論の中で「結婚」の代替語として数多のテキストの中に現れるだけでなく、婚姻をめぐる問題を人生の一大事とクローズアップさせ、果ては自由恋愛による結婚が新青年としての必要不可欠な条件と強調するのに効果をあげている。

その自由恋愛・結婚をめぐるテキストは五四期に多く生まれたが、筆者が注目するのは、その中でも〈新女性〉に死という結末が与えられるテキストである。⁽⁶⁾ 新しい人間像として称揚される〈新女性〉が悲劇的結末を迎えるのはなぜなのか。社会構造の変動の中でそれまでとは違う生き方を模索した／せざるをえなかった女性たちのそれぞれの営みは〈新女性〉という言葉によってある価値体系の中に押し込まれたのではないか。本稿では、テキスト中の〈新女性〉表象を、当時の〈新女性〉をめぐるメディアの中の言説を参照しながら読み解き、〈新女性〉という概念が抑圧装置として作用した可能性を検証したい。

今回その対象とするテキストは最も早い時期に〈新女性〉の死を描いた凌叔華の小説デビュー作「女兒身世太凄凉」(一九二四年)、メディアは五四期に女性解放論が誌上で活発に議論された『婦女雜誌』⁽⁷⁾である。

一、「女兒身世太淒涼」——〈新女性〉と〈旧女性〉の物語——

凌叔華の小説は、当時知識人が古い中国、古い制度を象徴するものとして、破壊と攻撃の対象としていた封建的な「家」の中に生きる「小姐」「太太」の内面を描いたこと⁽⁸⁾で高く評価されている。古い女性だけでなく、都会に住む夫婦二人のいわゆる「新しい家庭」でそれまでとは異なる貞操観念を持つ夫婦を描いた「酒後」(一九二五年)や、音楽の道に傾倒し家庭を捨てることも厭わなかった妻をめぐる「綺霞」(一九二七年)など、家庭や夫に縛られない独立した女性の自我をリアルに描いた作家でもある。その凌が、最も早い時期の短編小説「女兒身世太淒涼」(以下「女兒」と略)⁽⁹⁾において——「傷逝」に先駆けること一年前に——〈新女性〉の死を描いていることはたいへん興味深い。

小説の冒頭には晩春の花園が描写され、そこに二人の女が現れる。婉蘭とその従姉である。二人の女性は徹底的にその差異を強調される。婉蘭は憂いを帯びた青白い顔、それに対して白粉に紅い唇の従姉は明るく活発、という対照的な二つの身体が現れるだけでなく、⁽¹⁰⁾古色の漂う貴妃床で横たわる婉蘭と、揺り椅子の上で絶え間なく揺れ動く従姉という静と動の表象は読者に対立する二つの女性像を提示する。始めからしてこの二人には「旧女性」と「新女性」の烙印が押されているのだ。舞台となる花園は閉ざされた封建的な空間である。〈新女性〉の称揚と〈旧女性〉への批判的言説がメディアに溢れていた当時、読者はこの小説の冒頭から二つの女性像の対立を予期することだろう。

婉蘭が従姉に見合い結婚を勧め「そんな頑固に自由平等と言うものじゃないわ、自由平等は女が言っていけないだけじゃなくて、殿方だつて言えないことなのよ……」と従姉に語りかける場面によって、この従姉が「自由平

等」を説く〈新女性〉の一人だったことが伺える。婉蘭の忠告に対し、従姉は自分が複数の男性と自由に交際していること、そして婉蘭の婚約者が既に使用人の娘と関係を持つていたことを告げ、逆に「離婚」を勧める。

「社交公開」も当時の婦女解放をめぐる言説の中で一つのキーワードだったが、⁽¹¹⁾従姉はそれを忠実に実践していたと言えるだろう。「離婚」に関しても同様である。愛情のない結婚は不道德であるというエレン・ケイの思想を根拠に、そのような不道德な結婚は解消すべきであるとして、離婚の問題も盛んに議論されていた。⁽¹²⁾

婉蘭は婚約者の内実を突きつけられ戸惑い涙を落とすものの、父母に背くこともできず主体的な決断は何も下せないまま、従姉と別れを告げる。婉蘭の悲劇を予感させながら、旧女性と新女性の向かい合う場面は終わる。

二、〈新女性〉の死

一年後、婚家で夫と姑からの虐待を受けて精神的に弱り果てた婉蘭は里帰りする。かつてと同じ場所で婉蘭に寄り添うのは〈新女性〉の従姉ではなく、婉蘭の父親の三番目の妾、三嬢娘である。婉蘭はここで、両親には本当のことは話せないが、とした上で三嬢娘に自分の苦悩を打ち明ける。

婉蘭の告白自体は当時の〈旧女性〉イメージを再生産するものである。妻に貞操を守れることを強要しながら、夫の貞節は問われることもなく妾を持つことができるという旧い貞操観に支配された不平等な夫婦関係。婚家は舅姑の奴隷になるしかない嫁。大方読者の予想通りである婉蘭の告白の後、三嬢娘によって明かされる従姉の死は唐突であり、〈新女性〉の死のひとつのバージョンとして非常に興味深い。

「社交公開」を実践していた従姉は、三人の若旦那たちから一斉に求婚されるがこれを拒否する。疑心暗鬼になった三人の男はそれぞれ彼女がすでに彼らを「許した」のだと周りに喧伝し、さらには二人の交際に関するデ

マを「歪詩香艶文」の形で新聞に掲載させた。この侮辱により従姉は精神に不調をきたし入院するが今度はそれを誰が父親かわからない子を妊娠したからだと噂され、両親にも非難される。これらに耐え切れなくなった従姉は心の病を悪化させ死んだというのである。⁽¹³⁾

従姉は「傷逝」の子君のような女学生でもなく、家を出たノラでもない。しかし彼女が〈新女性〉の自覚を持っていたことは間違いない。このような〈新女性〉の死はやはり子君の死と同様「時代の限界」と論じることが可能であろうが、ここでは更に〈新女性〉表象についてももう少し踏み込んで考察したい。

「傷逝」では子君がどのように死んだかは語られていない。「とにかく死んだ」らしいと噂で伝えられるのだが、それが余計に子君の死を分かりづらいものとしている。「女兒」の中の従姉は精神を病んで死んだ。ここで興味深いのは、彼女に最後の一击を与えたのは両親の彼女に対する「恨み」だということである。彼女が父親の上司である王家に嫁がなかったことにより、父親は仕事を失ってしまい両親から恨まれることになる。「公開社交」や親の決めた結婚への反抗を強く主張していた従姉であるが、実際に自らの貞操を疑われ、両親にまで恨まれる——つまり「家」の中に娘としての位置を失うことにつながる——現実を目の当たりにして心身を病んでしまう。この時点で従姉にはもはや〈新女性〉の片鱗を見ることは出来ない。むしろ、父母の加護を失い病に横たわる姿は〈旧女性〉に近いイメージと見ていいだろう。

同じ年に魯迅は「ノラは家を出てからどうなったか」と題した講演の中で教条主義的になった〈新女性〉をめぐる言説を牽制し、現在の中国ではまだ女性がノラを模倣しても「墮落するか帰るしかない」⁽¹⁴⁾く、経済的自立を目指すに粘り強く闘うべきだと説いているが、その文脈に照らせば従姉は盲目的に〈新女性〉的なふるまいを礼賛したため悲劇的結末を迎えたと批判することもあるいは可能かもしれない。しかしそれでは、男性知識人が上位

に立ち、女性を〈新女性〉に導こうとしたという当時の構造の枠を出ることはできない。ここで注目したいのは、〈新女性〉としての身体イメージをまとめて現れた従姉が結局は〈旧女性〉の身体イメージによって表象され、死を迎えていることである。そこに垣間見えるのは従姉の新旧の間で揺れ動くアイデンティティである。

そもそも〈新女性〉イメージが膨張していた時代に、当時の女性はそれをいかに受容していたのだろうか。

三、〈新女性〉と〈旧女性〉に分断される女性

一九二五年六月の『婦女雑誌』は女学生特集号を編んでいる。多くの現役女学生・あるいは経験者の投稿も掲載され、当時の女性読者が〈新女性〉をめぐる言説をどのように受け止めていたかを垣間見ることが出来る。その他には〈新女性〉言説を引っ張ってきた知識人たちの論文も掲載されている。例えば巻末に王春翠⁽¹⁵⁾による「女学生の過去、現在、将来」という論文があるが、これらの論文と女学生（経験者）の投稿にある種の乖離が見られるのは興味深い。

王の論文は現在女学生である女性たちの将来について論じている。その要旨は、職業を持ち独立することと自主的な結婚をすることに絞られる。自分が仕事をする場合は男性と同程度の給料でなければならぬ。結婚に愛情が無くなればすぐにその家庭を去るべきである。貞操問題は自分に属する問題で、恋人に対し貞操を貫くのは正当なことだが、不可抗力のもとで貞操を守れない場合、それは不道徳にはあたらない。

このような先進的な婦女解放論は男性知識人の主流言説をそのままなぞっており、教条主義に陥っていることは否めない。王のこのような主張が当時の女学生をめぐる状況に照らせば現実的でないことは次のような投稿からも見て取れるであろう。

一八九九年生まれの寒梅という女性はこの号の「女学生時代の思い出」という特集に「小学校から高等師範まで」という文章を寄せ、自分の受けた教育について詳細に記している。十二歳の時辛亥革命が起こり、中華民国が成立すると各地に女学校が開き始め、寒梅もその翌年に女子師範学校に入学し五年を送る。彼女が故郷を離れる時見送りに来た親戚や近所の人は、彼女の母親に「今は本当に新法の時代ですね。お嬢さん方も勉強のため家を出ようだなんて。まだこんなに小さいのによく遠くまで行かせるものですね」と半ば同情し半ば批判するような言葉をかけたという。『人形の家』のノラがメディアの熱い歓迎を受けるより数年前のことであるが、この時代の娘たちが「家を出る」経験を自身の人生の中でリアルに経験していることは注目に値するだろう。民国八年（一九一九年）には設立されたばかりの北京女子高等師範学校に入学する。当時としては女性が到達しうる一番高い教育を受けた彼女は、当時の基準に照らせば正に〈新女性〉と言える。

卒業の年、同級生たちと演劇をして集めた旅費で日本見学旅行に向かった寒梅は、日本に向かう船上での光景を抒情たつぷりに書き起こしている。

長沙丸が出発した時、まさに風はなぎ波はおだやかで、私たち同行の二〇数人は皆笑いさざめいて歌を歌い、縄を跳び、どれだけ自由で、どれだけ活発だったことか！今でも忘れられない。カモメや野鳥だって私たちの生活を羨んだことだろう。

この時、私たちの希望はどれだけ大きかったことか！Aは「私の省の女子教育はまだ遅れているから、将来帰ったら絶対一生懸命運動するわ！」Bは「私は将来女子教育の普及のためにこういうの改革をして……」語り合っていると、将来の計画というだけでなく、多くの人が教育を一生の事業にしたいと願っていた。私と廬隠が南に戻る日、東駅まで送ってくれた先生や友人の中で大きな希望を抱かないものはひとりもいなかった

た。

だが、それとは対照的な嘆きで寒梅の手記はしめくられる。その卒業から二年半経ったが、当時の意気込みとは裏腹に何の事業も成しえていない自身への無力感。そしてかつてともに志を語り合った同級生たちは、病み亡くなりその志を果たせなかったものは言うまでも無く、他の同級生も大半は妻になり母になり、当時の目的を失ってしまったという。最後に書き残された「眞是令人不堪回憶呵！」の言葉が寒梅という一女性の苦悩を読者の胸に迫らせる。

女性解放の旗印は男性知識人によって高く掲げられ、そこに集まった女性たちも意気揚々としていたものの、現実の中でそれを実践しようとした時多くの女性が困難にぶつかっていたことを寒梅の手記は伝える。

そこには、独り歩きする〈新女性〉というシニフィアンの作り出した仮想のジェンダーグループとしての〈新女性〉ではない、生身の〈新女性〉の内面が語られている。このような内面の吐露から浮かび上がって来るのは決して「強い」〈新女性〉ではない。女の苦境を歎く姿は「弱い」「古い」女性の姿に近いものがあるとも言える。王の論文に照らせばこのような女性は或いは非難の対象となったかもしれない。男性知識人が女性を改造すべきものとして発見し、導こうとした視線を女性が内面化した時、王のように自分たち自身を〈新女性〉とそうでないものⅡ〈旧女性〉に分断することとなったのである。

「女兒」のテクストに戻れば、旧い家のしきたりに縛られそこから脱出できない婉蘭を従姉が「自分の一生のこ」とよ、親の言う事を聞くために人生の喜びを無駄にしないで」と諭す時、そこに重なるのは男性知識人が女性を〈新女性〉へと導こうとした構図である。従姉が婉蘭を見る視線は男性知識人たちが〈旧女性〉を見る視線と重なる。そして読者―識字能力があり、新思潮に理解がある男性、あるいは女性が仮定されるだろう―もまたそこに

自分の視線を同一化させて婉蘭を見るだろう。だがその従姉は〈旧女性〉と同様最後は旧い家の中で死んでしまった。この時読者の視線は「見る」主体を失い、宙をさまよう。婉蘭に対して自由意志に基づく結婚を勧める澆刺とした〈新女性〉が、男性たちや両親の庇護を失い病床に伏し弱々しく最期を迎えるというその変化に読者も婉蘭同様、不意をつかれるだろう。死によって露になった、このように新旧が矛盾して存在する複雑な従姉の内面は、〈新女性〉のイメージを解体するものであるかもしれない。

四、〈旧女性〉への視線

「女兒」において新旧の二項対立を身体の上に表象された二人の女性、婉蘭と従姉だが、婉蘭が従姉の死を「お姉様の運命までこんな悲惨になるとは思わなかったわ。…」と悼む時、そこにはある種の連帯が生まれている。それは常に見られ、批判される立場でしかありえなかった〈旧女性〉が初めて〈新女性〉へと向けた眼差しでもあったかもしれない。宙吊りになっていた読者の視線もこの時、ここに重なるのではないだろうか。

テキストの中で〈新女性〉の位置が空席になった後に現れた第三の女は三姨娘である。妾は言うまでも無く典型的な〈旧女性〉と見なされており、〈新女性〉からは攻撃される対象であった。だが「女兒」のテキストは〈新女性〉亡き後、二人の〈旧女性〉の対話を通じて彼女たちの内面の世界をさらに豊かにテキストの中に展開する。この時代にこのように〈旧女性〉の内面が語られることがいかに奇跡的だったか、当時の〈旧女性〉に向けられる視線の一例を再び『婦女雜誌』から拾って見る。

一九二三年の『婦女雜誌』誌上では読者を巻き込んだちよつとした論争が起こっていた。それは一九二三年二月に掲載された「私の婚姻史」と題する手記をめぐるものだった。⁽¹⁶⁾この手記の筆者は東南大学教授の鄭振堃で、

両親の勧めのままに旧式の結婚をするが、纏足をほどこうとしない、彼の思想を理解しようとする妻に失望し愛情を感じられず数年の結婚生活の後、実質上の離婚に至るまでを赤裸々に記録している。新思想の持ち主である筆者がいかに忠実に婦女解放をめぐる言説を自分のものにしてきたかは、手記の端々から読み取れる。母が媒酌人を介して見つけてきた妻について、ただ「纏足をほどこいてあるか否か」に固執したり、妻に愛情が感じられなくなったのに離婚に踏み切れないことに死を考えるほど追いつめられたりと、筆者にとっては新思想が一種の強迫観念になっている感さえある。〈新女性〉という理想像を持つ筆者にとって妻は改造すべき〈旧女性〉としてしか映っていない。妻に向ける視線は飽くまで冷淡で、サディスティックである。この手記の中の妻は夫に何を聞かれても上手く答えることは出来ず、ただ涙を流すばかりで主体性は感じられない。過剰なまでに語られる「新青年」の苦悩の内面に対して、妻の心の内は最後まで「わからない」としか評されない。

手記の最後に「(この手記についての) 批評を歓迎する」とあったため、筆者鄭氏へ様々な意見が寄せられそれが二ヶ月後の『婦女雑誌』に大量に掲載された。この中では、旧女性である妻を擁護する意見もあり、鄭氏が「妻が何を考えているのかわからない」と切り捨てるのに対し、最後の別れ際に「鶏肉をたくさん食べてください」と言ったのは妻なりの愛情表現であったのではないか、など〈新女性〉であるらしき投稿者が〈旧女性〉の声を拾おうとしていることも伺える。⁽¹⁷⁾

このように当時〈旧女性〉は語る手段を持たない存在として周縁化され、メディアの中でも彼女らは「見られる」「語られる」存在でしかなかった。先に見た鄭教授の手記に現れた旧女性は、なぜ纏足をほどこき、旧式の化粧をやめないのかと夫に問いただされてもそれに答える術を持たず「あなたの言う事を聞いていないわけではありません」と答えるのがやっつである。彼女たちは自分を語る言葉を持っていない。

「女兒」の婉蘭も、「二日に二度三度泣かない日は無かった」と語るように苦境にさらされると涙を流し歎くことしか出来ず、〈旧女性〉として表象されている。⁽¹⁸⁾しかし、続く婉蘭と三嬢娘という二人の〈旧女性〉の対話はそのような〈旧女性〉イメージの中には収まらないものである。

五、女たちの分断をつなぐ

〈新女性〉がテキストから消えた後、そこには〈旧女性〉の聲が溢れ出す。

「お姉さま（従姉を指す、筆者注）の運命までこんなに悲惨になるとは思わなかったわ。でも、男女交際はここまでという範囲を作らないこともできるでしょう。お姉さまは夜踊りに行ったり芝居を見に行ったりするのによく旦那様たちに送ってもらうことがあったけれど、それを見て周りで色々言う人はもともと少なくなかったわ」

「そうよ」三嬢娘は言った。「結局、中国の女は簡単に人に踏みつけられるのよ。お嬢様、私だって踏みつけられるのが怖くなかったらあなたの家には来なかったでしょうよ」

「三嬢、私ずっとそのことについて聞きたいと思っていたんだけど、なかなか言い出せなかったの。お父様はどうしてあなたと一緒にになったの？」

婉蘭が自分の婚家での境遇を両親に話せないように、三嬢娘の来歴について家の中では誰も触れることが出来なかった。〈旧女性〉たちは自らの歴史を語ることを禁じられていた。それは同時に自らの存在に向き合うことを禁ずることもあった。三嬢娘は養父母の決めた相手と結婚した後で夫に妻と一人の妾がいると知るがどうにも出来なかったこと、その後さらに二人の妾が増え一層苦悩を深めたことを語り、「ああ、女に生まれるのは何て辛

いことでしょう、私はいつになったらこの苦界から脱け出すことができるのかしら」と訴える。読者に〈旧女性〉の内面を発見させるこの三嬢娘の語りは前項で見たような、この時代に共有された〈旧女性〉のイメージを突き破るものと言えるだろう。

そして、婉蘭と三嬢娘は対話の中で〈新女性〉であった従姉も含めた彼女たちの悲劇を「女人」の苦しみへと昇華させている。これによって彼女たちは〈新女性〉と〈旧女性〉の分断をつなぎ合わせたと考えることはできないだろうか。「女兒」の最後に現れる「三嬢、昔の人は自ら求めれば福もまた多しと言ったじゃない。私たちはお互い励ましてやっていくしかないわ」という言葉と共に立ち上がる二人の姿は、新／旧の分断を越えて踏み出そうとする女たち自身の姿である。

おわりに

ここまで見てきたように、〈新女性〉というイメージはそもそもひとりひとりが個別の歴史を持つはずの女性たちを、新／旧に分断しうる暴力性も秘めていた。「女兒」のテキストにおける〈新女性〉の死はそのような暴力性の告発と言えるかもしれない。〈新女性〉の従姉が、最初から最後まで（婉蘭の）「従姉」としてしか登場せず名前が与えられていないことも注目に値するであろう。彼女は個別の名前を持たない——つまり個別の歴史を持たない——〈新女性〉というイメージの集合体としての役割も担っているのではないだろうか。「女兒」のテキストは〈新女性〉〈旧女性〉に分断されていた女たちがそれぞれに複雑なアイデンティティを持つ個別の存在であることを浮き上がらせ、また分断をつなぎ合わせた。五四期の男性によって構築された女性をめぐる言説を女性作家がどのように受容したかを考える上で、「女兒」は一つの到達点を示している。

注

(1) 本稿では一九世紀末期のイギリスに出現した“New Woman”という表現を起源に、中国で現れた「新婦女」「新女性」「新女子」などの表現を、〈新女性〉と統一して表記している。中国近代における「新しい女性」像の変遷については、江上幸子氏が抗日戦争前の「新婦女」を「賢母良妻」期、「ノラ」期、「職業婦女」期、「摩登女郎」期、「労働婦女」期と細分化して考察している。（『現代中国的「新婦女」 話語与作為「摩登女郎」 代言人的丁玲』『中国現代文学研究丛刊』二〇〇六年二期）本稿ではこれらの女性を『人形の家』のノラを共通のバックボーンに持つ一連の「解放された女性」像ととらえ、その共有する問題を俯瞰して論じるためにも〈新女性〉という表記を採用した。なお、それに相對する存在として「舊式女子」等と呼ばれた封建的価値感を持つ女性像を〈旧女性〉と表記している。しかしながら、これら一つ一つの言葉に固有の歴史と起源があることは忘れてはならない前提として注意したい。なお、引用した当時の文献・小説中の表現はそのまま原典に即して表記している。

(2) 原題は「娜拉」、『新青年』四卷六号 一九一八年

(3) 陳延濤 『東アジアの良妻賢母論』 双書ジェンダー分析一二 勁草書房 二〇〇六年

(4) レイ・チョウ 『女性と中国のモダニティ』 みすず書房 二〇〇三年

(5) 『新青年』六卷二号 一九一九年

(6) 五四期の〈新女性〉の死をめぐるテキストといえば、魯迅の「傷逝」（一九二五）が真っ先に挙げられるだろう。「傷逝」の子君もまた、封建的な家を飛び出し当時の典型的な知識人である消生と自由恋愛を経て同棲する中国のノラの一人である。戴錦華は『浮出历史地表』（孟悦と共著 河南人民出版社 一九八九年）において、「傷逝」の貢献は子君の死をもつて、この時代の婦女解放（個人の解放）の思想の限界を宣言したことであると述べている。また『中国映画のジェンダー・ポリティクス』（御茶の水書房 宮尾正樹監訳 館かおる編 二〇〇六年）においては子君を「五四時代の男性文人が自らをたとえた仮面と言えなくもない」と評している。「傷逝」は男性作家による〈新女性〉の受容の一例として、本稿で取り上げる「女兒身世太淒涼」とどのような相違を見せるか、比較することもできるだろう。時代は下るが三〇年代にも映画『新女性』において〈新女性〉である主人公が死に追いつめられている。また、〈新女性〉が同時代的に世界

中で現れたことは本稿冒頭で述べたが、それと同じように「新女性の死」も同時発生的に世界の文学の中に現れている。日本においては有島武郎『或る女』（一九一九）等が挙げられる。それら〈新女性〉の死が共有する問題は何かを考察することも今後の課題としたい。

- (7) 商務印書館により一九一五年から一九三一年まで発行される。近代中国において女性向け雑誌は数多く発行されたが、『婦女雜誌』は十七年間という長い発行期間と広範な流通区域を持ち、他誌を凌駕する影響力を有していた。近代中国におけるジェンダーをめぐる言説を参照するには欠かせない資料である。『婦女雜誌』の論調は三度の編集長交替の度替わっており、章錫琛が編集長を務めた一九二〇年から一九二五年までは婦女解放が喧伝された時期である。（注（3）陳二〇〇六）『婦女雜誌』と〈新女性〉についての研究には周紋琪一九九六「一九一〇～一九二〇年代都会新婦女生活風貌」『国立台湾大学文史叢刊』などがある。

なお本稿の『婦女雜誌』関連箇所執筆にあたっては中央研究院近代史研究所（台湾）『婦女雜誌』データベース <http://archwebs.mh.sinica.edu.tw/fnzz/> を利用した。

- (8) 同時代においては魯迅が「旧家庭の淑やかな女性をひかえめにほどよく描いた」（『中国新文学大系』「小説二集」序一九三五）と評価している。近年では注（6）孟悦・戴錦華『浮出历史地表』「第五章凌叔华：角隅中的女性世界」において凌の独特の視点として「時代に見捨てられようとしている女性たちの眼差しを借りて、意識的に、あるいは無意識的に「新女性」たちが見落としていた重大な問題に触れている。つまり女性と歴史、女性と進歩の微妙な関係である。また、人々が既に「過去」のものとして見ていたこの女性たちを決して骨董品のように描かなかった。むしろ古い中国最後の貴族の女性たちの経歴と運命を復活させ、語りなおし、その結果歴史感とジェンダー的特色に溢れた時代現象を描き出せた」と評価している。他にも注（4）レイ・チョウ二〇〇三等、フェミニズム批評の中で多く取り上げられている。

- (9) 『晨报副鐫』一九二四年一月十四日に瑞唐の筆名で掲載。約八千字。後に編まれた作品集に収録されなかつたため、陳学勇編『凌叔华文存 上・下』一九九八年（四川文艺出版社）に収録されるまで注目されることのなかつた初期作品である。本文中の引用は前掲『凌叔华文存 上』による。

- (10) 「從體育上看來的美人」謝似顔『婦女雜誌』九卷七期（一九二三）。著者は体育教育の必要性を説き、「健康美」「精神

美」がこれからの美人の基準であるとする。西洋の美学を引きながら新しい美人の基準を示し、その中で「どんなに容貌が美しくても皮膚の色が青白いのではまるで肺病のようで、美人ではない」と述べている。婉蘭には〈旧女性〉としての、従姉には〈新女性〉としての身体が割り振られている。

(11) 雁冰「男女社交公開問題管見」『婦女雜誌』七卷十期（一九二二）、呂聰民「婚姻問題之社交公開觀」『婦女雜誌』六卷二期（一九二〇）などがある。

(12) 『婦女雜誌』の八卷四期（一九二二）は「離婚問題号」として大々的に離婚問題を取り上げている。

(13) この従姉の一連の悲劇は、一九二四年の段階で、十年後に創出されるもうひとつの〈新女性〉の死、映画「新女性」（一九三四年聯華影業公司 蔡楚生監督 阮玲玉主演）の筋書きをすでに予言しているようで興味深い。

(14) 「ノラは家を出てからどうなったか」『墳』一九二七年

(15) 王春翠（一九〇三〜一九八七）夫は曹聚仁。家族ぐるみで付き合いのあった魯迅が二人の寓居に招かれた時、王が使用人に「太太」ではなく「王先生」と呼ぶように命じているのを見て「あなたは新女性ですね」と言ったという逸話があるという。「魯迅先生和兩位金華才女：『小姨』 金淑姿與王春翠」http://big5.ce.cn/culture/people/200610/19/t20061019_903823_1_2.shtml

(16) 特集：男女争門問題「我自己的婚姻史」曠夫編『婦女雜誌』九卷二期 一九二三年

(17) 特集：對於鄭振璦君婚姻史的批評「新舊的衝突」陳待秋『婦女雜誌』九卷四期 一九二三年

(18) 婉蘭については現代においても「自分が男にとっては玩具に過ぎないことを分かっているもその運命から脱出する勇氣は持ち合わせていない」（平嘯「走進女性——凌叔華筆下的女性世界」『江蘇社会科学』二〇〇〇年六期）と、典型的な〈旧女性〉として評されている。